エリクソンと幼児教育 (2)

仁科弥生

三、心理社会的発達段階

(一)口唇と感覚期

次にその発達段階の詳細をたどってみよう。

八つの発達段階の第一段階は最初の一年間にあたる。それは新生児が胎内での母親との共生生活を離れて、母親の乳房を与えられたときの最初の決定的な出会いで始まる。すなわち、新生児は、口から「取入れ」という生得的能力で、彼に食物を与えようとする母親の乳房に接近する。それは彼を迎える社会の意図とのはじめての出会いでもある。その最初の行動の基本様式は「取入れ」である。乳児はまさにその口を通して生き、口を用いて愛する。しかし、口唇部位は「取入れ」様式の中心であるに過ぎない。エリクソンは、この第一段階を、口唇―呼吸―感覚的段階とも呼んでいる。それは、第一の「取入れ」様式が皮膚の表面全体をも含めて、これら三つの部位の行動を支配しているからである。つまり、感覚器官や皮膚もはじめは受容的であり、やがて適切な刺激を欲するようになっていく。たとえば、口ははじめはあらゆるものが彼の口へ直接に運ばれてくることに依存している

が、やがて適切なものに進んで吸いつき、そこから出る液体を喜んで飲むようになる。

同様に、彼の視界に入ってくるものをその目で「取入れ」ようとし、またそれができるようになる。触覚も快感を与えるものを「取入れ」るようになる。しかし、これらを可能にするための乳児の身体の諸機能のすべてはきわめてもろいため、確実に彼を生存させ、彼の傷つきやすい呼吸や新陳代謝、血液循環などのリズムの協応を助けるためには、感覚への刺激が適当な強さでしかも適切な時期に与えられなければならない。そうでないと、彼の開かれた受入れの姿勢は、突如として防衛に変わることがある。したがって、この場合、乳児が生存していくための必要最小限度の供給が何であり、また耐えうる最大限のフラストレーションが何であるかは、かなり明白である。ところが起こっても差支えのないことに関しては相当な幅があるといえる。それらの中で何が実行可能であり、或は何が必要であるとみなすかということにあたって、それぞれの文化は大幅に特権を行使している点をエリクソンは指摘している。

たとえば、スー族では、かつて乳児は昼でも夜でも泣くたびに乳房が含ませられた。母親の乳房をおもちゃにして遊ぶことも許されていた。計画的な離乳のしつけなどまったくなく、授乳は三年から五年間続いたという。そのスー族の生活では寛容であることが一つの徳目とされていた。狩猟を生業とする彼らは、獲物に出会った幸運な仲間の分配や狩人としての腕のたつ仲間たちの施しに依存して生きていた。したがって彼らにとって寛容性の徳目は不可欠だったのである。してみると、その文化的要請は、寛容性の徳目を養う最初の基礎を母親の無制限の授乳を享受する乳児の特権においていたことになる。このように、何が「子どもにとってためになる」ことであり、何が「起こっても差支えない」ことであるかは、彼がどのような文化に属しているか、またその文化の中で将来どのような人間になることを期待されているかなどによって大きく変わってくるわけである。こうして乳児はその所属する文化の特定の育児様式との出会いを通して、その生得的な行動様式をその文化の社会的様式に適合するように変形させていくのである。

エリクソンは、一見、独断的にみえるさまざまな文化的条件づけの中に、このような集団固有の知恵というか、少なくとも無意識的な計画性といったもののあることを指摘し、同一性の確立のためにそれらが果たす役割を高く評価している。そこには、それぞれの文化の価値観の相対性を重視する彼のきわめて今日的な視点がはっきりうかがわれるのである。

さて、「取入れ」様式がこの段階の行動では優勢であるが、その他にいくつかの補助的な様式も乳児はもっている。たとえば、あごと歯ぐきで締めつけて、「かむ」という様式、吐き出すという「排出」の様式、口唇を閉じるという「保持」の様式、元気のよい乳児にみられる頭と首全体を乳房の間に押しつける「侵入」の様式などである。これらの補助的様式の中の一つが、ある子どもにはとくに著しいとか、ある子どもにはそれがまったくみられないなど個人差もある。そして乳児の側の内的抑制が失われた場合、或は母親の側の必要なものを供給する機能が失われて乳児と母親との相互作用が乱された場合には、そのような補助的諸様式が殆ど支配的な状態にまで発達することがある。

乳児の内的抑制の欠如の一例として幽門けいれんがあげられている。それは食物を飲みこむとすぐにまた吐き出すという症状を呈するが、そこには支配的であるはずの「取入れ」様式とともに強い「排出」様式がみとめられるわけである。それが重症の場合や、適切でない取扱いをうけた場合には、子どもは自己と外界との関係の基本的認知に決定的な影響をうけるといわれる。すなわち、それは「保持」の様式を早期に、しかも過度に発達させ、子どもは口を閉ざしてしまう。また食物が口内に入ってきても内に留まらないことの経験から、それは入ってくるものすべてに対する子どもの不信に発展する。母親側の供給源が相互調節の機能を失った例としては、乳房をかまれることを恐れて、習慣的に乳首を引込める母親の行為をあげることができる。このような場合、乳児は、くつろいで乳を吸うことに専念するかわりに、早くからかむという反射運動を発達させることになる。実は、このような事態が、人間の相互関係障害のもっとも深刻な場合の原型であることは臨床的資料の示唆するところである。人が何かを得ようと欲する。するとその供給源が引込められる。その人は反射的にそれを放すまいとしてしがみつく。しかし放すまいとすればするほど、供給源は一層決然と離れていく。

子どもの意識、協応、反応などの範囲が拡がるにつれて、子どもは自分が属する文化特有の教育の諸様式に出会うことになる。その過程は、周囲からのさまざまな刺激に対して子どもが未熟な反応様式を調整することによって、その社会の中で生きていくために必要な社会的行動の一つ一つを個人的にも文化的にも意味のある方法で学んでいる過程である。たとえば、「得る」こと、すなわち与えられるものを受け取ることは、人が人生で学ぶ最初の社会的行動である。これは簡単なことのようにも思えるが、実際にはそれほどやさしいことではない。まだ未熟で不安定な乳児の身体が、母親側の育児法に合わせて自分の諸器官を調節すること

を学んだときに、はじめてこの行動を学んだことになるからである。

したがって、乳児が「得る」ことを学ぶための最善の準備状態とは、乳児が母親との間に相互調節を行なうことができるということになる。つまり、母親がまず与える方法を発達させ、それに従って乳児が受け取る方法を発達させ、協応させる。そしてそれを母親が許す。このような相互調節が確立してはじめて乳児と母親は口と乳房という焦点的な器官を通してのみならず、身体全体で温情と相互性とをくつろいで示し合い、楽しむことができるようになるのである。エリクソンは、こうして発達する相互にくつろぎあう関係（彼はこれを信頼関係の表明と考えている）の獲得こそ乳児の他者との最初の出会いにおいてもっとも重要なことであると述べている。

さて、一年の後半になると、より積極的に、方向性をもって目標に接近する能力が発達し、乳児はまた、そうすることに喜びを経験するようになる。歯が生えてくると、硬いものをかむ喜びも発達する。これを形態的に拡大して考えてみると、この「かむ」という能動的な「取入れ」様式は、さまざまな他の活動をも特徴づけていることがわかる。目は、はじめは目の前に現われる印象を受け取るだけの受動的な器官であったが、今や焦点を合わせることを学び、不明瞭な背景の中から事物を区別し、それらを「とらえて」その後を追うようになる。同様に、聴覚器官も自分にとって意味のある音を識別し、その音源をつきとめ、身体を適切な姿勢にかえる手引きをするようになる。手は目的をもって物をつかむことを学ぶ。このような発達とともに、いくつかの対人関係の型が確立される。物を取り、それを放さないという社会的行動がその中心である。乳児は自分の姿勢をかえ、寝返りを打ち、徐々に座ることを学ぶにつれて、自分の手に届く範囲内にあるすべてのものをつかみ、吟味し、自分のものにするメカニズムを身につけていく。つまり、この段階では、「かむ」「つかむ」という第二の「取入れ」様式が支配的となるのである。しかし、このような進行が阻止されると、たとえば乳児はくつろいで吸う代わりに、「かむ」様式へ早熟的に進行するとか、逆に指しゃぶりというような第一の「取入れ」様式に固着する傾向が現われる。

しかしながら、この段階で、環境がいかに望ましいものであったとしても、衝撃を与えるような環境の変化から乳児を守ることはできないこともエリクソンは指摘している。その理由は、歯が生えてくるからである。しかもそれが離乳の時期と時間的に接近して生えてくる。また、同じ頃、母親が職場へ復帰したり、或は次子を妊娠したりして、乳児は母親との分離を経験させられるこ

ともある。しかも、それまで快感を味わう主たる座であった口腔内に歯が生えてくると、それが引き起こす緊張や痛みは、一層強くかむことによってのみ軽減されるのである。それは、まさにマゾヒズム的ジレンマである。その上、それは社会的ジレンマをも招来する。なぜなら、今や乳児は「かまない」で乳房を吸うことを学ばなければ、母親が痛みと怒りから乳房を引込めてしまうからである。そのとき、乳児はかもうとする自分の歯に対する怒り、乳首を引込める母親に対する怒り、さらに自分の無力な怒りに対する怒りに圧倒されてしまう。このように母と子が互いに補足し合う行動による相互調節の型では対処しきれない激しい怒りを乳児は不可避的に経験し、しかも自己の無力さから敗北を喫することになるのである。

エリクソンは臨床的研究の症例をもって、個人が結ぶ自己との関係、および外界との関係におけるこの幼児期初期の破局が自己内部の不幸な分裂の起源となりうることを説明している。そして、それだけに、乳幼児期における母親やそれに代わる養育者との結合は深く、また満足すべきものでなくてはならないと説いている。また、子どもがさらされる人間性の中にある免れがたい「悪魔」（たとえばかみたいという欲求）に対して、これ以上の悪化を避けるためには、おだやかに、安心感を与えながら、それを経験させることが大切であり、離乳にしても、それが乳房の突然の喪失や、母親という安心感を与える存在の喪失を意味するものであってはならないと警告している。事実、この時期に慣れ親しんだ母親の愛情を突如として失い、しかも代理となる者がいないと、子どもは抑うつ状態に陥り、或はそれ以後の子どもの生涯を通して陰うつな潜在的性質として残る場合のあることは、他の文献にも示されている。

したがって、この段階で学習しなければならない発達課題は、子どもが母親を通してこの世界を信頼しうるようになることであるとエリクソンは主張する。乳児の外界に対する信頼の最初の表明は、授乳時に示すくつろぎ、睡眠の深さ、便通のよさなどの形で示されるという。やがてそれは、母親がそばにいなくても、泣いたり、怒ったりしないで、母親の不在を受け入れることができるようになることなどで示される。それは、一つにはピアジェが明らかにしたように、知的発達にともなって対象の永続性の概念が獲得され、子どもに母親のイメージを保つことのできる能力が発達してきたからである。だがそればかりではない。母親の存在が子どもにとって内的な確実性をもつようになったからでもある。ここでエリクソンが信頼と呼んだものは、必要物を供給してくれる外的存在がいつも同じであることや、連続性を有している

ことを子どもが期待するようになったという意味と、子どもが自分自身を信頼し、さまざまな衝動に対処する自分の諸器官の能力を信頼するようになることをも含んでいる。このような経験の一貫性や連続性や斉一性が自我同一性の基本的感覚を準備するのである。

また、この段階の危機が望ましくない方向へ解決された場合、基本的信頼が根底的に損傷をうけ、不信が優勢になるとされている。一部の研究者は、信頼感とか自律性といった諸特性を、ある状態において一回限りのこととして獲得される「達成事項」とみなし、各段階のそのような肯定的特性だけを数えあげて、彼ら独自の達成尺度を作ろうとしている。そのような試みに対して、エリクソンは、各段階に存在する不信や疑惑など否定的な対応要素を無視してはならず、肯定的な特性と否定的な特性の割合が決定的要因となることを強調している。動物行動学者として有名なローレンツもその著書『文明化した人間の八つの大罪』の中で、愛や信頼がそれ自体善であり、不信がそれ自体悪であるという考え方は、われわれの社会では一般に善の不足と悪の過剰が支配しているということから発しているにすぎないのであって、それらは調和的に働いている一つのシステムの環であり、それ自体として不可欠の環であると述べている。エリクソンも不信の不可欠性について、基本的信頼が基本的不信を上回るバランスをもって永続的なパターンとして確立されることが必要であると説いており、子どもの自我は不信に打ちひしがれることなく、それを耐えることを経験することで、それを克服する強さをつけていくと考えている。

エリクソンによると、自我に課せられた最初の仕事は、生存を続けることに関連して起こる基本的信頼対不信という核心的な葛藤を解決するために永続性のある様式を確立することである。それは母親側の世話にとっても大切な課題となる。先に述べたように乳児は母親との相互関係の中で基本的信頼を学び、不信を経験する。その場合、乳児が最初期の経験から得る信頼の念の量は、与えられる食物や愛情の絶対量によるのではなく、母親との関係の質によって左右されるとエリクソンは強調している。すなわち、信頼感の確立にはまず、乳児と母親とが相互性の感情を築きあげるまでの過程が重要である。母親が乳児の欲求の表出を理解できるようになるにつれて、乳児もまた自分の欲求が満たされるであろうという期待を形成していくのであり、この相互性は、母親が乳児の欲求に対して適切に反応するときの一貫性を基礎にして築かれるのである。

発達の理論的方向づけを統合するものとしてエリクソン理論を

高く評価するニューマンらも、養育者との相互作用の重要性を力説している。たとえば、母親が子どもの欲求にどれほど敏感に応じているかによって子どもは自分の欲求が満たされ、自分が価値ある存在であるという確信を高めていくことができる。また母親以外の家族との相互作用の中で示される暖かさや喜びの経験を通しても信頼感は強められていく。しかし一方、そこには不信感を強める可能性もまた存在している。もし母親が子どもの欲求を理解することができず、これらの欲求に対して適切に反応することができなかった場合や、欲求に応じてはいるものの、それが乱暴であったりした場合には、外界に対する不安や疑惑が子どもの心の中に芽生えると述べている。このように自分の欲求が満たされることに対する不確かさの感覚や、身体的、心理的慰めが得られないという感覚によって不信感が芽生えるのである。ことばをもたない乳児にとって信頼および不信はまさに体験にもとづいた現象なのである。

エリクソンによると、信頼感の確立にとって次に重要なことは、母親自身が養育者として信頼されているという自信と、自分がやっていることには意味があるのだという確信とをもって子どもを育てることである。その意味で、伝統的なしつけの体系は、たとえその中の特定の項目が不合理であったり、ことさらに残酷にみえたとしても、それは全体としては子どもの心の中に信頼感を植えつける重要な役割を果たしうると考えられている。今日のように、価値観の変動のはげしい時代では、世代間の諸価値のあまりの違いに、ともすれば母親の自分に対する信頼は失われやすい。それだけに、まず母親自身が自己への信頼、育児に対する自信をもつことが、子どもの成長する力に対する信頼とあわせて必要であることをわれわれは再認識しなければならないと思う。

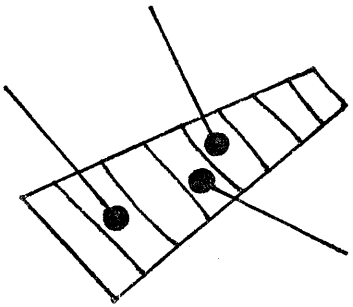
これまで述べたように、口唇―感覚の段階は、乳児に基本的信頼感と不信の源泉を形成するが、それと同時にこの時期に、基本的な生きる「希望」という精神構造の発達的基盤があるという構想をエリクソンはつけ加えている。すなわち、終始一貫した存在として面倒をみてくれる母親は乳児にとってははじめての対象の確証であり、それゆえに「希望」の基盤となるのである。そして「希望」は、この発達の第一段階で得るべき徳目であると概念化されている。徳目とは、基本的にわれわれ人間がもっており、われわれを生かし、その活動を意味づけ、生き生きとさせる内的な力であると定義されている。そして「希望」とは、求めれば必ず得られるという期待、或は願望は達成できるという確信をもちつづける傾向のことである。希望は、一旦叶えられて確かな経験となると、具体的な成功や不成功による希望や失望から独立して存

在するようになる。なぜなら希望が実現するという成功経験を得ると、それはさらに新しい希望を生み出し、次にたとえ失敗しても失望することなく、次のよりよい結果を目ざして努力するようわれわれを促す力となるからである。したがって、希望は周囲の事態が変化しても、一貫して維持されるものである。人間は、状況や条件の変化する中で、生涯にわたって信頼と不信との闘争を重ねていく。それだけに、希望は一層不可欠なのである。エリクソンは、たとえ信頼が損われたとしても、希望だけは存在させなければならないと説いている。乳児院の子どもの身体的、精神的発達の遅れや高い死亡率は、乳児期における養育者との親密な関係の欠如が主な原因であるとしたスピッツの研究を、エリクソンは、子どもが環境に対する確信や信頼の感情がもてず、生きる望みを失った例としてあげている。

ところで、自我形成の基盤になるという意味において、乳児が生後一年間の経験を通して基本的信頼感を獲得することの重要性をエリクソンは強調しているが、このことは、われわれにマターナル・デプリベーションに関する研究を思い起こさせる。シャファーとエマーソンの特定の人との間に形成される親密な感情的結びつき（アタッチメント）の発達についての研究によれば、生後ほぼ七ヶ月ごろに特定の人に対するアタッチメントが生ずると報告されている。勿論、それ以前に、特定の愛着が形成される礎石となる一貫性、暖かさ、親密さなどの経験が重ねられて、子どもは特定の人物にたいして、徐々に好意を形成していくのである。アタッチメントの最初の対象は殆どが母親であったが、中には父親や祖父母が対象であったり、母親とそれらの人々が同時に対象になるケースもあったと報告されている。シャファーらは、アタッチメント形成を規定する要因として、一、子どもが母親と一緒に過ごす時間、二、母親以外の人との接触程度、三、子どもの泣き声に対する母親の反応性、四、子どもと母親との相互交渉の程度などを有効な要因と考えている。

マターナル・デプリベーションは後年のパーソナリティの発達にさまざまな影響を与えると考えられているが、ラターは、乳幼児期に人との結びつきの形成に失敗することが後年の情愛欠如の性格の発達とともに関連することを指摘し、アタッチメントの形成以後の家族との分離体験よりも、むしろ乳幼児期のアタッチメントの形成そのものの失敗をその原因として重要視している。そして母親以外の多くの人物とのアタッチメントを促進する配慮が実際的かつ有効であると提言している。すなわち、この最初の社会的愛情が母親との間に確立されないと後の信頼や親密性の経験などが成立しにくいとみるのである。一方、この関係が形成され

ると、それを土台にして、次々と他の人との関係を結ぶことが可能になるのである。したがって、この初期の愛着は、愛することのできる能力、他者に自分の愛を伝えることのできる能力のリリースにとって、きわめて重要な経験であるといわなければならない。これらの研究成果との関連においても、パーソナリティ発達の第一段階の課題を基本的信頼感の獲得であるとするエリクソン理論の意義はますます大きいといえよう。

こうして子どもの自我は、情緒的成熟や認知的成熟に支えられながら、まず自分の身体を統御することを学び、それら諸器官で社会的環境を知覚し、信頼をもって周囲の人々と交わっていくことを学んでいく。そして、この最初期の母子の信頼関係に勇気づけられて、子どもは次の段階のむつかしい発達課題を達成しようとする努力を積極的に行なうようになる。したがって、母子の間に信頼が確立されることは、子どもの知的発達や社会的発達にとっても大きな意味をもつことになるのである。

（津田塾大学）